

化している」ということを、身をもって感じているのだ。

### 衝撃的だった女子高校生殺人事件

私の記憶に残る衝撃的な事件のひとつに「女子高校生コンクリート詰め殺人事件」がある。一九八八年十一月二十五日、四人の不良少年のうちの一人が自転車で帰宅途中の女子高生をバイクで通りすがりがさまに蹴倒し、転倒させた。そこに仲間の一人が親切な通行人を装って助け「家まで送る」といって、近所の倉庫の暗がりに入れ込み、そこで「オレたちはヤクザだ。セックスさせろ」と脅し、輪姦したのだ。この四人はこの事件をおこす前のひと月の間に女子高校生二人とOL一人を輪姦している常習犯だった。

四人に連れ去られた女子高生は溜まり場になっている仲間の一人の自宅に連れて行かれ、飽くなき性の奴隷とされた。彼女はすきを見て警察に電話をするがそれを見つかったことで、ライターのオイルを足首にたらされ、そこに火をつけられるなど常軌を逸した拷問を受けるに至った。その後、この火傷が化膿し悪臭を放つようになったことで、彼らは彼女の処分を考えるようになったのだ。

彼女は監禁されている間、強姦され続け、さらには殴る蹴るの拷問を受け続け、そして果てた。彼らはその死体をドラム缶に入れ、その上からコンクリートを流し込み東京湾に

捨てようとしたのだ。

四十一日もの間、被害者であり続けた彼女はいったい何を考え、犯され殴られ蹴られ焼かれたのだろうか。

いつもと変わらない家路をたどり、いつもと変わらない生活をしていただけなのに。突如として降りかかった悪夢のような出来事。制服を着た女子高生だったというだけで、大人になり幸せをつかむことを断たれ、短い人生を終えたのだ。

この事件に加害者として加わった少年は十七、八人存在するが、検察官による求刑も裁判官が下した量刑も、たった四人を対象にただで、そのうえ犯人たちの演技にやすやすとだまされた結果、愚かなまでに軽かった。

社会の実態というものを感知できない司法エリートの劣性が露呈されてしまった典型的な事例となった。

また、犯行の中心となった四人以外はほとんどが処罰をのがれている。これは「大問題」であり、治安不安定因子を放置したと言われても反論できまい。

ちなみにこの犯罪少年たちは、広域暴力団の下部組織を構成しており、彼らの組織名は上部団体の一字をとっていた。つまり、裾野ではあるがれつきとした暴力団の構成員である。上部団体の監督責任を云云うんぬんしたところで、良民の見識など持ち合わせぬ連中だから議

論が成立するわけもない。普段実話雑誌などで「格」を有すると持ち上げられている上部団体の幹部たちだが、本当に情や道義を重んずるのならキツチリとガキどもの仕置をしてやるべきだったろう。「警察がある」などと逃げ口上を言う資格は「反社会的集団」を解散せぬかぎりないのである。

この少年グループの一人は刑期を終えた後、二〇〇四年七月、再び、恐喝事件をおこし逮捕された。もちろん社会に出てきたのはこの一人だけではない。一足早く出てきた別の男は、お笑い系のコンビを組んで芸能界でデビューしたという。

事件をおこしたときに少年だったというだけで、名前も経歴も伏せられ、素知らぬ顔をして社会に舞い戻ってくる凶悪犯罪者たち。彼らは陵辱され、サンドバッグがわりに暴力を振るわれて絶命させられた女子高生や残された家族にいつたいどんな謝罪をしたのだろうか。施設の中でどれほどの反省をしたのだろうか。

彼らが、たとえどれほど代償を払ったとしても、被害者が還ってくることはないし、遺族の心を苛む「悲しみ」「怒り」「苦しみ」、そして「果てしない絶望感」はどれひとつとして癒されることはないが。